

初めて知った助け合いのしかた

更別村立更別中央中学校 1年

遠藤 弘基

僕の祖父は国内外で建築の仕事をしている。平成二十三年の三月から平成二十六年の三月まで、約十一回 JICA の仕事としてバングラデシュに行っていた。そこでは地震が多いので地震にたえられる建て物や橋などの建て方を現地の人に教える「技術移転」というシゴトをしていたそうだ。

最初は、なぜ教えるだけなのだけなのだろう、なぜつくらないのだろう、その方がよるこばれるのにも思った。だが、祖父と話をしてみても教えることの方がバングラデシュの人のためになる事がわかった。

祖父は僕に、「例えば、弘基が五十代まで洗たくをお母さんにやってもらうのと、やり方を聞いて自分で洗たくできるようになるのは、将来的にどっちがいいと思う。」と聞いてきた。僕はその時、「断然やり方を聞く方がいいよ。だって、いつまでもたよるのは、はずかしいから。いつかは、ちゃんと自立していたいから。」と言った。すると祖父は「バングラデシュの人もそうだと思うよ。それに、やり方を教える方が、応用できるようになるしね。」

ぼくはその話を聞いて、ただただやってしまっただけより、先に教えてもらってそれから自分でできるようにしてあげる方が相手にも将来的にいいのかと気がついた。それに教えてもらった人がまた別の人に教えれば、いい技術が広がるのでそういう点でもいいと思った。

また祖父は、バングラデシュでは、英語を使っていたそうだ。だが、現地の人にはベンガル語を使っていたそうだ。僕も英語とベンガル語などの外国語をしゃべれるようになりたい。そして祖父のように外国へ行き、人助けなどをしたい。

今回祖父と話して、JICA の仕事の一部を知ることができたし、各国の助けかたにもいろいろな方法があるとわかった。

色んな外国語を使いながら現地の人たちのためになるやり方を教えてその方法で助けをしている JICA やそういう団体で働く祖父をすごいと思った。